様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20500223
研究課題名（和文）　成果共有型ネットワークを活用した独習／協調研修プログラムに関する実証的研究
研究課題名（英文）　An Empirical Study on Independent/Collaborative Training Program Using Product-Sharing Network System for Reference Librarians
研究代表者
小田　光宏　（ODA MITSUHIRO）
青山学院大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：00185604

研究成果の概要（和文）：「成果共有型ネットワーク」としての特性を有する国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」を活用した図書館職員向けの研修プログラムを作成し，その有効性を実証実験によって検証した。まず，所定の性格を有する研修プログラムを開発し，教材と研修要領を固めた。その上で，2009 年度と 2010 年度に 12 の研修会にこれを適用し，質問紙調査及び面接調査により，有効性の確認を行なった。その結果，開発した研修プログラムの性格に関する肯定的な意見が多く示され，有効性があることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to verify the efficiency and effects of a training program using Collaborative Reference Database System of National Diet Library of Japan recognized as “a product-sharing network system” for reference librarians. At first, developed was a training program with prescribed characters and natures. Secondly, the author applied this to 12 training sessions in 2009 and 2010. The results of the questionnaire survey to the trainees and the interview to trainees and organizers show that effectiveness and effects of the program are confirmed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：図書館情報学
科研費の分科・細目：情報学，図書館情報学・人文社会情報学
キーワード：情報図書館学，情報サービス，成果共有型ネットワーク，能力開発，図書館職員研修

１．研究開始当初の背景

社会変容ならびに利用者ニーズの多様化に基づき，資料と情報の専門家となるべき図書館職員に求められる知識や技術もまた高度化・複雑化している。とりわけ，図書館の専門的業務の中核に位置するレファレンスサービスの知識と技術を育成し，向上させるための研修プログラムに関する実践的な研究の果たす意義は大きいことから，効果的な研修プログラムの開発とその有効性の確認を行う研究に着手した。

研修プログラムは，ネットワーク環境の特性を活かし，独習（個別学習，independent learning）を行うとともに，研修参加者の協調に基づく学習（協同学習，collaborative learning）によって，能力向上を図る形態とすることを目指した。また，平成 18 年度・19 年度の科学研究費補助金による萌芽研究

「成果共有型ネットワークを活用した図書館職員の技能育成に関する研究」において着目した，国立国会図書館の「レファレンス協同データベース（以下,「レファ協」と記す)」を「成果共有型ネットワーク」と位置づけ，これを活用することを前提とした。

２．研究の目的

「成果共有型ネットワーク」としての特性を有する国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」を活用した図書館職員向けの研修プログラムを作成し，その有効性を実証実験によって明らかにすることを目的とした。また，効果的かつ汎用的な研修プログラムの普及に貢献することを，本研究の最終的な実践面での成果と位置づけた。

３．研究の方法

(1)　研修プログラムの開発

はじめに，研究目的に適した研修プログラムの作成に着手した。これには，前述の萌芽研究の成果を基盤にした。また，各地のレファレンスサービスをテーマにした研修会の実態を確認するとともに，併せて，研修会の企画者や指導者に対する聴き取りを行い，研修プログラム作成の参考にした。さらに，筆者自身が講師を依頼された研修会において得られた経験的知見を活用した。

(2)　実証実験の実施

研修プログラムの効果を検証するために，下記の研修会を実証実験の機会と位置づけた上で，企画者ならびに参加者に協力を求め，研修プログラムの有効性をと課題を確認するためのデータ収集を行なった。下記のＮ以外は，調査者自身が講師を務めている。

［2009 年度］

Ａ．福井県立図書館主催「平成 21 年度福井県公共図書館職員実務講座」(2009 年 10 月 21 日，13 時～16 時 20 分)，参加者 32 名。

Ｂ．千葉県立中央図書館主催「平成 21 年度レファレンス研修会」(2009 年 10 月 22 日，13 時～16 時 30 分)，参加者 16 名。

Ｃ．宮城県図書館協会主催「平成 21 年度公共図書館等職員研修会Ⅲ（午後）」(2009 年 12 月 4 日，13 時～15 時 30 分)，参加者 31 名。

Ｄ．栃木県公共図書館協議会「平成 21 年度レファレンス研修会（午前）」(2010 年 2 月 10 日，10 時～12 時)，参加者 25 名。

Ｅ．佐賀県公共図書館協議会主催「平成 21 年度中堅職員研修会」(2010 年 2 月 23 日，13 時 30 分～16 時 30 分)，参加者 35 名。

Ｆ．北九州：北九州市立中央図書館主催「平成 21 年度レファレンス研修会」(2010 年 3 月 2 日，13 時～16 時)，参加者 43 名

Ｇ．千代田：千代田区立千代田図書館主催「平成 21 年度レファレンス研修会」(2010 年 3 月 3 日，15 時 30 分～17 時 30 分)，参加者 8 名。

［2010 年度］

Ｊ．大分県公共図書館等連絡協議会・大分県立図書館共催「平成 22 年度第 3 回大分県公立図書館等職員研修会（午前)」(2010 年 9 月 13 日，9 時 50 分～12 時，参加者 67 名。

Ｋ．秋田県図書館協会主催「平成 22 年度市町村図書館・公民館図書室職員研修会」(2010 年 10 月 19 日，13 時～16 時)，参加者 23 名。

Ｌ．千葉県立中央図書館主催「平成 22 年度レファレンス研修会」(2010 年 10 月 21 日，13 時～16 時 30 分)，参加者 18 名。

Ｍ．宮城県図書館協会主催「平成 22 年度公共図書館等職員研修会Ⅲ（午前)」(2010 年 12 月 3 日，10 時 30 分～12 時 20 分)，参加者 14 名。

Ｎ．｛第 45 回なごやレファレンス探検隊（一部)」(2011 年 2 月 10 日，19 時～21 時)，課題への取り組み人数不明。

なお，上記のＪとＮでは，他と異なる手法が組み込まれている。まず，Ｊでは，登録された結果に対するコメントを，講師ではなく大分県立図書館職員が行なっている。これは，コメントを付与することにより，県立図書館職員自身の技能向上に資するよう取り入れたものである。すなわち，研修会が二つの技能向上に貢献することになり。機能向上の機会の「二層構造」の可能性を意識させる。

また，Ｎでは，演習課題の設定その他の作業を，なごやレファレンス探検隊内の指導者が行なっており，他の研修会のような講師は存在しない。すなわち，参加者自身の自発的な研修会の形式となっており，本研究で目指した独習／協調型研修の一つのあり方を模索したものとなっている。

(3)　検証データの収集

①　参加者対象質問紙調査

検証データ収集には，まず，研修会の参加者を対象にした，質問紙調査を実施した。この調査は，前掲のＮを除くすべての研修会で実施した。すなわち，研修会の終了時に，その場で記入・提出することを求めた。

質問紙は，事前作業要領，事前課題，研修会の講義内容，研修プログラムの意義に関する，計 19 の選択式の設問と，向上したと思われる能力，自由意見記入，フェイスシートから構成される。中心となる 19 の設問の選択肢は，下記の通りとした。

あてはまる（以下，Ⅰ）

多少あてはまる（以下，Ⅱ）

あまりあてはまらない（以下，Ⅲ）
あてはまらない（以下，Ⅳ）
わからない／答えられない（以下，Ⅴ）

② 面接調査

参加者対象の質問紙調査とは別に，面接調査（聴き取り）を企画者と参加者に，事後に実施した。まず，企画者に対しては，研修プログラム全般にわたる意見を求める場を設けた。これは，主に研修会の終了後に，自由意見の形で述べてもらい，その記録を蓄積した。次に，参加者に対する面接調査は，前掲の研修会のうち，協力が得られたＥ，Ｊ，Ｋの参加者の一部を対象に，下記のように実施した。面接の方式は，半構造化グループインタビューを採用し，参加者の意見の広がりが得られるようにした。

・2011 年 1 月 24 日・25 日（秋田県）
研修会Ｋの参加者（横手市立平鹿図書館，同雄物川図書館の職員）
・2011 年 1 月 27 日・28 日（大分県）
研修会Ｊの参加者（大分市，佐伯市，臼杵市，中津市，宇佐市の各図書館職員）
・2011 年 2 月 3 日・4 日（佐賀県）
研修会Ｅの参加者（佐賀県，佐賀市，鳥栖市，小城市，武雄市，嬉野市，江北町，玄海町，大町町の各図書館職員）

③ 有識者に対する意見聴取

最後に，研修プログラム，ならびに，それを適用した研修会に関する状況について，研修活動に対して造詣が深い図書館員や研究者に研修プログラムに関する意見を求めることを予定した。これは，研修会そのものが，調査者自身が講師を務めることが大半であったことから，第三者からの客観的な評価を得ることを目指したものである。この意見聴取は，上記面接調査の結果を踏まえて，2011 年 3 月後半に実施することを予定していた。しかし，東日本大震災の影響により，中止することとなった。

４．研究成果

(1) 研修プログラムの概要

① 研修プログラムの性質

研究方法の確定後，研修プログラムのプロトタイプを作成し，秋田県立図書館の協力のもとに，2008 年度と 2009 年度に試行し，検討ならびに改良を重ねた。その結果，次の性質を有する研修プログラムの作成に至った。

・ハイブリッド形式：遠隔型で行う部分と，集合型で行う部分とを融合させる。
・事前課題（宿題）解決型：事前課題を参加者に示し，所属する図書館で取り組むようにする。
・質問回答演習：作業課題として，レファレンス質問を提示し，これに回答する演習形式とする。
・プロセス志向アプローチ：レファレンス質問に対する「答え」よりも，回答に至った（あるいは，至らなかった）処理過程に着目する。
・レファレンス記録ベース：演習に対する取り組みを記録し，客観化するために，「レファ協」に登録する。
・事例比較法：同一の課題を複数の者が担当し，その結果を比較する。
・原理追求重視：特定の情報源の理解だけではなく，検索の原理や情報源の特性に目を向けさせ，応用力を身に付ける。
・参加意欲・達成感の向上：「レファ協」のコメント機能を活用し，課題への取り組みに対する講師（指導者）からの意見等を返し，参加者の参加意欲（モチベーション）や達成感（インセンティブ）を高める。

② 教材作成

研修プログラムの実施を効果的にするため，次の教材を作成した。

・作業課題：参加者のレベル，所属する図書館の状況を踏まえたレファレンス質問を用意した。
・事前作業要領：研修の趣旨や手順，「レファ協」の取扱い方法を参加者に伝えるガイドラインとなる電子教材を作成した。

③ 研修要領

研修会においては，研修プログラムが汎用的なものとなり，かつ，効果的なものとなるように，また，収集するデータが均質となるように，次の要領で進めることを目指した。

・事前課題提示：参加者は，教材をパソコン（場合によっては，サーバ上）で確認して，取り組む。
・スケジュール：事前課題の提示から研修会の開催の間に 3 週間前後の期間を設ける。また，「レファ協」への課題登録の締め切りを，研修会開催日の 1 週間前くらいに設定する。
・会場：「レファ協」への登録結果を確認するために，講師が操作する PC 画面のデモンストレーションが可能なようにする。
・時程：2 時間～3 時間とする。
・参加者数：参加者ひとりひとりの結果を確認するための時間が確保できるように，20 人～25 人程度を想定する。
・オプション：会場，時程，参加者数の状況や，企画者の意図に応じて，グループ討議やレファレンス情報源の紹介などを組み合わせることを可能にする。

(2)　結果と考察

①　参加者対象質問紙調査

本成果報告書では，参加者対象に実施した質問紙調査の結果を，2009 年度実施のＡからＧの研修会と 2010 年度実施のＪからＭの研修会に分けて示し，そこから読み取ることのできる傾向を指摘したい（ＩからＶのローマ数字は，３(3)①に示した選択肢と対応している)。

Ａ．事前作業要領について

これについては，下記のように，2009 年度，2010 年度とも肯定的見解が多数となった。

・「事前作業要領」は，事前作業の趣旨を理解するのに役立った

2009（N=190）	Ⅰ	148	(77.9%)
	Ⅱ	40	(21.1%)
2010（N=121）	Ⅰ	99	(81.8%)
	Ⅱ	17	(14.0%)

・「事前作業要領」は，レファ協の操作方法を理解するのに役立った

2009（N=190）	Ⅰ	147	(77.4%)
	Ⅱ	39	(20.5%)
2010（N=121）	Ⅰ	97	(81.2%)
	Ⅱ	19	(15.7%)

・「事前作業要領」は，事前作業の進め方を理解するのに役立った

2009（N=190）	Ⅰ	153	(80.5%)
	Ⅱ	36	(18.9%)
2010（N=121）	Ⅰ	93	(76.9%)
	Ⅱ	25	(20.7%)

・「事前作業要領」の記載内容は，わかりやすかった

2009（N=190）	Ⅰ	130	(68.4%)
	Ⅱ	36	(27.4%)
2010（N=120）	Ⅰ	84	(70.0%)
	Ⅱ	30	(25.0%)

Ｂ．事前課題について

まず，事前課題を作業として行う環境と日数に関しては，回答が分散する傾向となった。

・事前作業の資料をパソコンで見るのが不便だった

2009（N=188）	Ⅰ	21	(11.2%)
	Ⅱ	42	(22.3%)
	Ⅲ	41	(21.8%)
	Ⅳ	72	(38.3%)
2010（N=122）	Ⅰ	9	(7.3%)
	Ⅱ	31	(25.4%)
	Ⅲ	27	(22.1%)
	Ⅳ	51	(41.8%)

・事前作業に取り組む日数が短かった

2009（N=189）	Ⅰ	17	(9.0%)
	Ⅱ	32	(16.9%)
	Ⅲ	61	(32.3%)
	Ⅳ	77	(40.7%)
2010（N=122）	Ⅰ	10	(7.38%)
	Ⅱ	23	(18.9%)
	Ⅲ	40	(32.8%)
	Ⅳ	48	(39.3%)

次に，レファ協の活用に関しては，操作に関する事前の心理的抵抗があるものの，操作そのものが難しいとは意識されていない。

・レファ協に結果を登録することに不安があった

2009（N=190）	Ⅰ	21	(11.1%)
	Ⅱ	66	(34.7%)
	Ⅲ	39	(20.5%)
	Ⅳ	60	(31.6%)
2010（N=122）	Ⅰ	15	(12.3%)
	Ⅱ	42	(34.4%)
	Ⅲ	25	(20.5%)
	Ⅳ	37	(30.3%)

・レファ協の操作方法が難しかった

2009（N=190）	Ⅰ	2	(1.1%)
	Ⅱ	33	(17.4%)
	Ⅲ	58	(30.5%)
	Ⅳ	95	(50.0%)
2010（N=122）	Ⅰ	5	(4.1%)
	Ⅱ	23	(18.9%)
	Ⅲ	38	(31.1%)
	Ⅳ	52	(42.6%)

さらに，事前に取り組む演習問題に関しては，難易度に対する認識の分散はあるものの，作業量（取り組む問題数）については，肯定的な意識が強い。

・事前作業で取り組んだ演習問題が難しかった

2009（N=190）	Ⅰ	13	(6.8%)
	Ⅱ	59	(31.1%)
	Ⅲ	73	(38.4%)
	Ⅳ	41	(21.6%)
2010（N=122）	Ⅰ	12	(9.8%)
	Ⅱ	32	(26.2%)
	Ⅲ	44	(36.1%)
	Ⅳ	31	(25.4%)

・事前作業で取り組んだ演習問題の数が少ないと思った

2009（N=188）	Ⅲ	73	(38.8%)
	Ⅳ	88	(46.8%)
2010（N=122）	Ⅲ	53	(43.4%)
	Ⅳ	52	(42.6%)

Ｃ．研修会場での講義について

講義そのものに対する反応は，研修プログラムだけではなく，研修会そのものに対する意識ともなるので，詳細はここでは省略することにしたい。傾向としては，「内容理解」「時間配分」「構成」といった設問に対しては，

おおむね肯定的であった。
　ただし，研修会場のスクリーンの大きさ（投影される PC 画面の文字サイズ）や，スクリーンとの距離など研修会場の環境に関しては，研修会による条件の違いを反映した結果となっている。

D．研修プログラムの意義について
　これについては，受容的見解が多数を占めている。ただし，参加者自身の能力向上に対しては，明確に認識していないか，または認識できない，あるいは，戸惑いがあることが確認できた。

・事前作業に取り組んだ上で講義を聞くやり方は，有効だと思う
　2009（N=189）　Ⅰ　171（90.5%）
　　Ⅱ　17（ 9.0%）
　2010（N=122）　Ⅰ　112（91.8%）
　　Ⅱ　9（ 7.4%）
・研修会の内容は，職場での実務に行かせると思う
　2009（N=188）　Ⅰ　159（84.6%）
　　Ⅱ　28（14.9%）
　2010（N=122）　Ⅰ　103（84.4%）
　　Ⅱ　16（13.1%）
・研修会に関して，自分の力が伸びたと思う
　2009（N=187）　Ⅰ　94（50.3%）
　　Ⅱ　81（43.3%）
　2010（N=122）　Ⅰ　57（46.7%）
　　Ⅱ　51（41.8%）
・今後，同様の研修の機会があれば，参加してみたいと思う
　2009（N=190）　Ⅰ　136（71.6%）
　　Ⅱ　42（22.1%）
　2010（N=122）　Ⅰ　91（74.6%）
　　Ⅱ　27（22.1%）

E．向上したと意識される技能
　この設問では，レファレンスサービスに関係する下記の技能を例示し，複数回答可能で選択する形式を採用した。選択した参加者数は，次のような結果となった。

・レファレンスブックの使い方
　2009（N=190）　85（44.7%）
　2010（N=122）　43（35.2%）
・インターネット情報源の使い方
　2009（N=190）　126（66.3%）
　2010（N=122）　95（77.9%）
・情報の効果的な探索方法
　2009（N=190）　132（69.5%）
　2010（N=122）　89（73.0%）
・レファレンス質問の処理手順
　2009（N=190）　88（46.3%）
　2010（N=122）　67（54.9%）
・レファレンス記録の作成方法
　2009（N=190）　113（59.5%）
　2010（N=122）　80（65.6%）
・レファ協の操作・登録方法
　2009（N=190）　101（53.2%）
　2010（N=122）　53（43.4%）

F．クロス集計における特徴的な傾向
　それぞれの設問に関して，図書館の勤務年数，レファレンスサービスの経験年数，研修会で想定している参加者層などとのクロス集計を試みたところ，次のような傾向が確認できた。

・事前作業要領について：レファレンスサービスの実務経験年数の長いほうが，より肯定的な回答の割合が高い。また，図書館の勤務年数の長いほうが，より肯定的な回答の割合が高い。さらに，中堅職員向けに行われた研修会のほうが，より肯定的な回答の割合が高い。
・事前課題への取り組みに対する意識：レファレンスサービスの実務経験年数の長いほうが，より肯定的な回答の割合が高い。中堅職員向けに行われた研修会のほうが，より肯定的な回答の割合が高い。
・その他の項目：レファレンスサービスの実務経験年数の長さ，図書館の勤務年数の長さなどによる傾向の相違は見られない。

②　面接調査
　事後調査として実施した企画者対象の面接調査，ならびに，参加者対象の面辣調査では，研修プログラムの性質に関して，後記するような肯定的意見が数多く表明された。
　なお，企画者と参加者との間で，大きな意識の相違が見られるような発言はほとんどなかった。また，面接調査で表明された意見の多くは，参加者対象質問紙調査の自由記述に記された意見とも一致した。

［意見例］
・ハイブリッド形式について：「事前に自分で「考える」ことをする研修であり，当日との関係においても充実していた。」
・事前課題（宿題）解決型：「事前課題を出されたことによって講義の内容がわかりやすく，効率がよかった。」
・質問回答演習：講義だけでなく演習もあったので，実践的で良かった。」
・プロセス志向アプローチ：「同一の質問に対する様々なアプローチやプロセスについて知ることができた点が良かった。」
・レファレンス記録ベース：「過去の事例を残すことの大切さを学んだ。」
・事例比較法：「他の方のやり方と比較することで，色々な情報源の活用方法を知ることができ，視野を広げられた。」

・原理追求重視：「レファレンスサービスとは何であるか，分析，戦略，アプローチといった点を意識しつつ，幅広い角度から捉えることの重要性を改めて認識できた。」
・参加意欲・達成感向上：「実際に課題が出題されて，先生のコメントをもらうことは，とても有意義である。自分の回答の良い所，悪い所，問題点がわかりとても良かった。」

(3)　結論

３(1)及び３(2)のことから，次のことが，結論として指摘できよう。

第一に，研修プログラム全体に対しては，おおむね肯定的な結果が得られている。とりわけ，教材として開発した「事前課題要領」に関して顕著である。また，ハイブリッド型の研修プログラムという性格に対しても，賛同する意識が極めて強い。また，面接調査や質問紙調査の自由記述において，プロセス志向アプローチ，事例比較法の採用，原理追究重視が効果的であるとの意見が数多く見られた。さらに，面接調査において，質問回答演習による実践的な研修の意義を強調する意見が示されている。総合すると，当該研修プログラムが有効であると判断できる。

第二に，質問紙調査におけるいくつかの設問において，やや否定的な見解も見受けられ，研修プログラムの改善課題となる。とりわけ，事前課題の取り扱いに関しては，注意を要する。例えば，遠隔型の研修には必須であるパソコン上での事前作業の確認に関しては，2009 年度，2010 年度ともに，３分の１程度が不便と感じる傾向が現れている。その一方で，不便と感じていない者も多くいることから，参加者の置かれている環境の差が大きいと考えられる。また，「レファ協」への登録作業の経験者が極めて少ないこともあり，両年度ともに，半数近くの参加者が登録に不安を覚えている。それゆえ，不安を解消するしくみを取り入れることが課題となる。さらに，両年度ともに，４割前後の参加者が，事前課題が難しいと受けとめており，課題の難易度に関する検討を重ねる必要があろう。

第三に，能力向上における参加意欲・達成感の向上という点では，参加者自身は，技能向上に対して十分に実感していない。このことは，再度の参加に対する意欲にも影響していると推測される。ただし，向上したと意識した技能の種類は，「情報の効果的な探索方法」を筆頭に，レファレンスサービスに求められる基本的技能を多くの者が挙げている。したがって，当該研修プログラムは，レファレンスサービスの技能獲得に結び付いているものの，そのこと自体をいっそう明確に意識できるような「しかけ」を研修プログラム内に用意することが，課題として確認できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 小田光宏，カナダ・ケベックシティにて得たもの：IFLA2008 参加報告（http://www.ndl.go.jp/jp/publication/biblos/2009/winter/01.html），びぶろす-Biblos,平成 21 年冬号,2009,N.P.，査読なし.

② ODA, MITSUHIRO, Professional Development and Training for Librarians in e-Learning Environment, Journal of Knowledge Processing and Management, No.9, 2008, 1-8, 査読なし.

〔学会発表〕（計５件）

① ODA, MITSUHIRO, Creating a Culture of Librarian's Knowledge Sharing: A Trial in Japan, International Conference on Digital Libraries & Knowledge Organization, 2011 年 2 月 16 日, Management Development Institute（グルガオン，インド共和国）

② ODA, MITSUHIRO, Product-Sharing and Outcome Generation: New Contributions of Libraries to Research, Learning and Professional Development in Japanese Context, International Conference commemorating the 40thAnniversary of Korean Society for Library and Information Science,2010 年 10 月 8 日，ソウル教育文化会館（ソウル，大韓民国）

③ 小田光宏，成果共有型ネットワークを活用したレファレンス研修プログラムの有効性に関する研究，2010 年度日本図書館情報学会春季研究集会，2010 年 5 月 29 日，同志社大学新町校舎.

④ 小田光宏，河合郁子，レファレンスサービス研修の要件に関する研究：研修モデルの形成を目指して，平成 21 年度西日本図書館学会春季研究発表会，2009 年 6 月 27 日，熊本学園大学.

⑤ ODA, MITSUHIRO, Professional Development and Training for Librarians in e-Learning Environment,（韓国）文献情報処理研究会，2008 年 11 月 14 日，延世大学（ソウル，大韓民国）.

６．研究組織

(1)研究代表者

小田　光宏（ODA, MITSUHIRO）
青山学院大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：00185604